The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	テクストが生まれる時、テクストが変わる時 : 共同研究「テクストの生成と変容」をふりかえって
Author(s)	飯倉, 洋一
Citation	テクストの生成と変容. 2008, p. 3-8
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47718
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

テクストが生まれる時、テクストが変わる時

—共同研究「テクストの生成と変容」をふりかえって—

飯倉　洋一

研究会の発足

2005年4月からの３年間、私は大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座を運営することになった。初代の荒木浩・二代目の浅見洋二の両先生の跡を継いで、専門分野を横断するテーマで何らかの研究会を立ち上げ、その運営を中心にして成果をあげていかなければならない。この荷の重い仕事を引き受けた時には先行き不安であったが、ともすれば江戸文学という狭い殻に閉じこもりがちな私にはいい勉強の機会でもあると前向きに受け止めて早速テーマを考えることにした。最初に思いついたのは、「寓意と表徴」というテーマ。これなら、哲学にも、芸術にも、文学にも共通する問題ではないのか。しかし学生には不評。わかりにくいというのだ。たしかにこのテーマだと発想が限定されてしまう。そこで前任浅見プロジェクトの「テクストの読解と伝承」の真似ではないかという謗りを甘んじて受けることを覚悟の上で、「テクストの生成と変容」というテーマを捻り出した。平凡といえば平凡。しかし、静的空間的な対象として分析されがちなテクストを、動的に把握することで時間と空間を超え、専門領域も超えることができる。これは広域的主題ではないかと思いこむようにした。半ば苦し紛れのテーマ設定だったのだが、後で思えば広域的であるばかりではなく、奥深いテーマでもあったのである。

そもそもこの講座は文学Aブロック（日本文学・比較文学・中国文学・国語学）の誰かが担当することになっている。この講座を引き受けるにあたって、文学Aブロックの先生方にご参加いただくというお願いをし、皆様の御快諾を得た。研究会メンバーの核の部分はこれで出来た。赴任４年目であった私にとって、研究会メンバーを募っていくことは大変な難事であるように思えたので、これは実に力強いことであった。2004年12月の忘年会と2005年3月の送別会で、私は「なりふりかまわず」という形容が誇張ではないほどに、次々と「標的」を定めて勧誘の矢を放った。いずれも超のつく多忙な方々、さぞかしご迷惑なことと及び腰でお願いしたが、その反応は異口同音に「喜んで参加します」という好意あふれるものであった。この研究科の先生方は本当に研究が好きなのだと、ここでも感激を新たにすることが出来た。

口頭でご参加を約束して下さった先生方を中心に、研究会ご参加のお願いを書面でお送りしたのは、2005年4月14日であった。その内容は次の通りである。

平素はご厚誼をたまわりありがとうございます。
さて、今年度から３年間、広域文化表現論講座を担当することになり、同講座のプロジェクトとして「テクストの生成と変容」という研究会を発足させることにいたしました。
先生には是非この研究会にご協力・ご参加をいただきたくお願い申し上げる次第です。
共同研究では、文学テクストのみならず、思想・芸術（絵画・音楽・演劇）の「作品」をもテクストととらえ、文字通り〈広域文化表現論〉の立場から、テクストの生成と変容の問題を考えております。テーマとしては次のようなものを考えています。

① テクスト生成の場—テクストが生成されるための、広い意味での〈場〉の問題。連歌や俳諧などの座、絵解き、お伽、談義講釈、詩社、共同制作など。
② テクストの変遷—推敲・添削・改作などをめぐる問題。
③ テクストの受容—引用・翻案・パロディなどをめぐる問題。

第１回の研究会は５月中旬に開催する予定ですが、その後、年数回ほど研究会を開催していくつもりです。その都度ご案内を差し上げますが、先生にご発表をお願いする場合は、先生のご都合を優先して、日程を組みたいと存じますので、なにとぞよろしくお願い申し上げます。
なお、この研究会にかかわるご研究をされている先生、助手の方、大学院生の方、卒業生の方がいらっしゃいましたら、ご紹介いただけると幸いです。
また研究会に対して、ご提案、アドバイスなどをいただけますと幸いに存じます。
最初の研究会メンバーが決まりましたら、第１回研究会のご案内とともに、お知らせ申し上げます。

こうして集まったいただいた研究会メンバーは、哲学・芸術学・文学・語学にわたり、西洋・東洋・日本の境界を超える、文字通りの「広域」の面々であった。
同年春に制作された「文学研究科紹介」の冊子に、次のようにプロジェクトの紹介を書かせていただいた。原稿のファイルの日付は５月 10 日になっている。

共同研究「テクストの生成と変容」
テクストがいかにして生成したかという問いへの答えは、「作者」の創作意識を探ったり、草稿から定稿への生成過程を辿ることのみには求められません。口伝・口承・談義・講釈などの言説の場からテクストが生成したり、〈うたげ〉〈座〉などのような、共同体的な磁場からテクストが生まれることがあります。その場合はテクスト生成の場と、そこに関与するさまざまな社会的・文化的事象を解析しなければなりません。
また、テクストは常に流動しています。現代作家の手になる「作品」でさえ、草稿段階、新聞・雑誌掲載時、単行本としての出版時、全集収録時、文庫本収録時と、刻々と変化することは珍しくありません。まして神話や古典において、テクストが流動・変容していくのは常識です。なぜテクストは変容しつづけるのでしょうか。
本共同研究でいうテクストは限定的なものではありません。哲学・文学・美術・演劇・音楽など、あらゆる領域のテクストを扱ってゆくことになるでしょう。もちろん、テクストの出自は日本・東洋・西洋を問いません。テクストの動態に注目し、テクスト研究のあらたな地平を拓くべく、共同研究を進めていきたいと思います。研究会は随時開催しますので、大学院博士後期課程の学生諸君の参加と、前期課程学生の聴講を期待しています。

教員だけでも 20 名を超える研究会メンバーが揃い、それだけで私はほっとしてしまった。今になって反省するのは、このような研究会を発足させるにあたっては、理論的な勉強という準備が必要であるのに、ほとんどそれを怠っていたということである。研究会メンバーから「勉強が大変だったでしょう」という意味のことを言われた時には、実際背中に冷や汗が流れた。松澤和宏『生成論の探究』（名古屋大学出版会、2003 年）の存在を知ったのも、恥ずかしながらだいぶ後になってからである。

研究会の足跡—2005 年度

それでも、無恥と無知の強みでみずからが報告者となって第１回の研究会を強行した。2005 年５月 19 日である。本来であれば、私自身が大きな研究課題としていた上田秋成の自筆稿本の生成・変容の問題を扱うべきであったとも思うが、秋成については別途特別研究会を企画する心づもりがあったので、別の研究課題である「奇談」書に関わる報告をすることにした。『宇治拾遺物語』『古今著聞集』などの説話が江戸の別の題名の説話集に取り込まれているのだが、その本文や挿絵の変容を追った報告である。問題提起のつもりであったとはいえ、オリジ

ナルの見解が少なかったのは我ながら情けない。江戸中期の教訓本『田舎荘子』中の「猫の妙術」と『吾輩は猫である』の関係なども話題にしたが、元より重松泰雄が指摘しているものである。研究会には聴講の学生を含め30名以上が参加して下さったので、船出としては上々だったと思う。

それにしてもこの時点で、次の報告者も決まっていないという行きあたりばったりのスタートであった。第1回研究会終了後に次回発表者を募ると、その場で浅見洋二先生（中国文学）が名乗り出てくださった。前任者として気を使ってくださったのだろうと思う。１年目に関してはほとんどこのような状態で次回報告者を確保するのがやっとであった。２年目に入ってようやく、２，３回先の報告者まで決めておかれるようになってきたのである。

さて第２回研究会は2005年７月７日に行われた。浅見先生が、中国の文学論における「形似」論を取り上げて、中国における言語表現の秩序とその変容をめぐって考察を加えられたものである。豊かな報告内容と質疑応答であったが、印象的であったのは、この時参加した日本文学専攻の院生が、「これが「広域」なんですね」と、感想を漏らしていたことである。普段はなかなか聞くことのない他分野の研究の最前線を知ることができて得るところがあったらしい。この研究会を発足させてよかったと思ったことであった。

第３回研究会は2005年10月20日に行われた。英文学の服部典之先生にお願いした。18世紀後半に次々に誕生する「私生児小説」が、当時の社会状況の中から生まれたことを説き、その文学史的意義を説くものであった。テクストだけではなく、当時の地図などを資料として示すダイナミックな報告であり、「生成」を歴史的レベルで捉えたものだった。西洋文学の発表をはじめて伺い、新鮮な感動があった。

第４回研究会は2005年12月22日、日本漢文学の権威である後藤昭雄先生に「呪願文の形成」というご報告をお願いした。後藤先生は2005年度をもって大阪大学を退職されることになっていた。そのため先生はいろいろな学会でご発表やご講演を依頼されていたようだったが、私の依頼に快く応じて下さった。先生は私の出身大学の大先輩でもいらっしゃるので、後輩のために一肌脱いで下さったのである。

第５回研究会は、特別研究会と題して美術と文学の両方から「絵画を読む」というテーマでご報告していただくことを目論んだ。このテーマでのご発表を、美術史の奥平俊六先生にお願いしたところ、ご快諾いただいた上に、フィラデルフィア美術館学芸員で大阪大学大学院博士後期課程の学生でもある木下京子氏を紹介してくださった。

ＡＶ施設の充実している教室で、暗幕を張っての研究会は、いつもと雰囲気の違うものだった。多くのスライドを見せていただきながら、美術館で玉瀾の展覧会の準備を進めている木下氏の発表を聞いた。文学の側からは、絵画資料を駆使しての研究でも業績のある荒木浩先生に「朝政の風景」についてスケールの大きいお話をしていただいた。ちなみに荒木先生は広域文化表現論講座の担当を経験されていることもあって、本研究会にとても協力的であられたことをここに付記させていただく。トリは絵画というテクストの生成と変容を読み解いてきた奥平先生の「姿の意味」という報告であった。スリリングなお話に時間を忘れて聞き入った。懇親会では、美術史関係の人が多数参加してくださって盛り上がった。映画『ロッキー』でスタローンが石段を駆け上り雄叫びをあげるシーンの舞台がフィラデルフィア美術館であることも教えていただいた。その後、木下氏は2007年度後期の私の講義に来て下さり、無事に終わった大雅・玉瀾の展覧会の図録を下さった。そこには本研究会メンバーの海野圭介氏（現ノートルダム清心女子大学）が協力執筆者として名を連ねていたが、本特別研究会で面識を得たとのことである。「広域」ならではの「人の縁」を感じて嬉しかった。

研究会の足跡—2006年度

第６回研究会は2006年５月18日、音楽学の伊東信宏先生にお願いした。実際に音楽を流しながら、バルトー

クのピアノ曲の生成と変容について緻密に報告していただいたもので、本研究会に伊東先生をお誘いしてはどうかと私にアドバイスしてくださった和田先生が興奮気味に質問されていたのが印象的である。美術・音楽という文学テクストとは異なるテクストの生成・変容の報告が行われたことで、本研究会も、いよいよ佳境に入ってきた。

第7回研究会は2006年6月15日、和田章男先生に生成研究とは何かという基本的な問題についてお話していただいた。私が「テクストの生成と変容」というテーマで共同研究を立ち上げた時に、真っ先に、研究会にお誘いしたのがプルーストの草稿研究など、生成研究の第一線を走っておられる和田先生であった。先生は本研究会の趣旨に賛同され、「いつでも報告できる」とおっしゃり、私を安心させてくださっていたし、じっさい毎回のように研究会に参加された。この回の報告で、フランス文学における生成研究の方法・課題が非常によく理解できた。

第8回研究会は2006年8月3日、樋口一葉・森鷗外作品の生成をめぐって、出原隆俊先生にご報告いただいた。出原先生は日本近代文学研究者の中でも、屈指の読み手であろうが、特に驚嘆するのは、意外な、しかし説得力のある典拠の指摘を次々に行ってきていることである。今回も典拠研究の醍醐味を味あわせて下さった。ちなみに出原先生は懇親会にもほぼ毎回参加してくださった。この場を借りてお礼申し上げる。

第9回研究会は2006年10月19日、上野修先生にお願いした。本研究会では初めての哲学研究者の報告であったが、内容は『聖書』という人類最大のテクストともいえる教典の解釈をめぐる興味深いものであった。スピノザの『神学・政治論』をわかりやすく説いていただいた。

第10回研究会は2006年12月21日、演劇学の永田靖先生に、演劇における「第二のテキスト」である演出台本について、スタニラフスキーの『かもめ』演出台本を例にお話しいただいた。戯曲（テキスト）とパフォーマンス（上演）の間にある演出台本に注目することで、新たな演劇研究の地平を拓こうという意欲が伝わってくる発表であり、質疑もきわめて活発であった。ちなみに、このあとの忘年会は盛会だった。

そして2007年3月16日の特別研究会「秋成—テクストの生成と変容—」（第11回）を迎える。この特別研究会は、半年以上も前から企画、発表者を公募し、コメンテーターを依頼した。私の専門である上田秋成のテクストという限られた対象での議論を本研究会のような専門の垣根を超えた研究会に投げかけときにどのような反応があり、何が生ずるのか、未知との遭遇に期待を膨らませた。当日は前半で一戸渉（総合研究大学院大学（院））・辻村尚子（大阪大学（院））・近衞典子（駒澤大学）の各氏が発表、それぞれに1名のコメンテーターを配して、秋成の著作について、その生成と変容を議論した。後半は秋成研究において本文の問題で最も議論の多い『春雨物語』について、木越治氏（金沢大学）が問題提起し、3名のコメンテーターとフロアによる討論を行った。実に濃密な時を共有することができた。参加者は約70名を数える盛況であったが、それ以上にその議論の熱さが印象に残った研究会であった。その模様は本報告書にも詳報されているが、特にここで謝辞を申し述べさせていただくことをお許し願いたい。

参加者のおひとりである水田紀久先生は、わざわざ午前中にご所蔵者山脇愛子氏宅（羽曳野市）まで出向かれてお借り下さった、秋成肖像としては最も有名な肖像である甲賀（加藤）文麗画の秋成肖像を会場にお持ちになり、研究会に華を添えて下さった。それぞれの発表者・コメンテーターは、セッションが終わるたびに、この秋成肖像とともに記念撮影した。研究会席上でも貴重な御発言を賜り、懇親会でも浪高の歌をご披露いただくなど格別の御厚情をたまわった先生にこの場をお借りして深く御礼申し上げる。神谷勝広氏も秋成短冊をはじめとする関連資料をお持ち下さり、会場はミニ秋成展の様相を呈した。神谷氏にも深甚の謝意を表する。この研究会には外部にも告知したので、他にも、島津忠夫先生・浅野三平先生という、まさかと思うような先生方が、来会され、かつ御意見を述べてくださったことは感謝に堪えなかった。島津先生には懇親会の閉会時に、浅野先生には研究会の閉会時にそれぞれ御挨拶も賜った。また懇親会に差し入れをしてくださった廣瀬千紗子氏・柏木隆雄先

生にも深く感謝申し上げる。その日は懇親会も40名ほど、二次会にも20名が参加、いつまでもテクスト談義に花を咲かせていた。本特別研究会は、外部の方を多く招き、遠方からも多数の方が参加するということもあって、会場の整備や案内、受付、資料配布など、他大学を含む多くの学生諸君の献身的なご協力を受けた。彼らへもありがとうと申し上げたい。

この研究会の発表者・コメンテーターと議論に参加して下さった人々を中心に、『秋成文学の生成』（森話社、2008年）という本をつくることができた。特に木越治氏には共編者になっていただき、構成・人選などでご尽力いただいた。出版にあたっては文学研究科のご援助を賜っている。これについてもお世話になったすべての方々に感謝申し上げる。

研究会の足跡—2007年度

最終年度の最初の研究会（第12回研究会）は2007年５月17日に行われた。報告者は柏木隆雄先生。この日の参加者は特別研究会を除いて最も多い39名であった。柏木先生は2005年度まで研究科長を務めておられた。私は当初から柏木先生を本研究会にお誘いしたかったのだが、御多忙を極めている先生をお誘いする勇気がなかった。しかし、いつだったか、「なぜ僕を誘わないのか」と笑顔とともに言われたので、研究科長を退かれた2006年度からメンバーに入っていただいたと記憶する。以来先生はほぼ毎回参加され、研究会とそのあとの会を終始リードしてくださったのである。どのような発表に対しても、その質問に含まれる知見は発表者と丁々発止渡り合うほどのものであり、指摘は的確であった、そういう印象がある。２年目以降、研究会の運営が大分楽になったなあと感じていたが、それは私自身の慣れもあろうが、それ以上に柏木先生のご参加が大きかったのである。さて、柏木先生のご報告は誰もが一度は読んでいるであろう『ヴィヨンの妻』の生成に関わるスリリングで緻密な考証に基づく新説であった。フランソワ・ヴィヨンという謎の詩人の日本における受容の問題など、興味のつきない話題を提供された。

第13回研究会は2007年６月21日に行われた。報告者は加藤洋介先生。書写という行為に着目して『伊勢物語』の生成と変容を考えられたものであった。「原典をめざして」行われる本文校訂や写本書誌学に対し、むしろ書写という行為を通してテクストが変容する現場を捉えようとする発想の提唱に頷かされた。加藤先生は 2006年に着任された。河内本『源氏物語』の本文研究の第一人者であり、テクストの生成と変容という本研究会のテーマに非常に関わりの深い方であるので、着任してすぐに参加していただいたがほぼ毎回参加して下さった。

第14回研究会は2007年７月19日（木）に行われた。報告者は蜂矢真郷先生で「語の変容と類推—語形成における変形について—」と題するものである。テクストを構成する要素としての語も、国語史的にみれば変容する。その理由はさまざまに考えられようが、我々はテクストの変容を考える時に、テクストの作者や読者（書写者）の意図や誤操作として考えるが、語そのものの変形がそこに反映しているかもしれないということにはなかなか気付かない。蜂矢先生のご報告は上滑りなテクストの議論を戒める教訓でもあった。３年間の研究会活動の中で、蜂矢先生の義理堅さは際立っていた。第５回の特別研究会の時は、中之島で社会人向けの講座のあと駆けつけて下さったこともあった。深謝申し上げる。

以上、長々と述べてきたが、14回におよぶ研究会はいずれも刺激的で、新しい知見をもたらし、脳をやわらかくしてくれたと思う。これらの研究会を通して、私じしんが得たものは言葉につくせないほどだが、あえてひとつだけあげるとすれば、それは、「人の縁」である。日本文学、それも近世文学という狭い領域についつい閉じこもりがちな私だが、この研究会を３年間運営することで、さまざまな「人の縁」に恵まれた。それは研究会のメンバーにとどまらない広がりを持つことになった。畢竟、研究の視野が広がるとは、専門外の研究者と知り合い、その人の研究内容に触れることによってしか実現しない。本研究会を文学・語学の領域に限定せず、できるだけ

広い領域の方々に集まっていただいたことは、すくなくとも私にとって本当に意味のあることだった。

授業および報告書について

広域文化表現論講座は、研究会とともに、もちろん授業も行ってきた。2005年度は、秋成の和文消息文集である『文反古』（文化五年刊）を、その草稿的存在である天理大学附属天理図書館蔵の秋成自筆写本『文反古稿（仮題）』と比較して読んでいくことで、秋成和文消息の生成と変容を考えた。この成果は『文反古』注釈として、一応成稿化しているが、細かいところに不備があったり、不明な点が残っており出版には至っていない。現在改稿を進めつつある。ただこの演習を通して、和文消息という本来個人宛の閉じられたテクストが、出版という開かれたテクストになる時に、本文がいかに変容し、流動するかということについては、かなり明らかになってきた。私と演習に出席した辻村尚子によって考察され、その一部を本報告書に掲載することができた。2006年度は、学生に自由にテクストを選んでもらい、そのテクストの生成と変容について報告してもらった。2007年度も同様に行ったが、対象を大阪大学所蔵文献に絞るという制約を課した。制約は時として創造力の駆動エンジンとなる。そこから論文につながるような発表もあったのである。

さて、報告書については、研究会での報告者・未報告者を問わず、全員に論文または小文（エッセイ）のご寄稿をお願いした。報告内容をそのまま論文化してお寄せ下さった方もいれば、新たなテーマで書かれた論文を提出された方もいる。また研究会で報告されていなかったが、報告書にはご寄稿してくださった方もいた。第11回の、「秋成—テクストの生成と変容」については、発表者・コメンテーターを大阪大学の外部からお招きしたこともあり、報告の要旨（辻村尚子の場合は論文）と討論の内容を掲載することにした。なお、この時の発表者である、一戸渉氏・近衛典子氏・木越治氏の報告内容は、論文化されて、別途刊行した『秋成文学の生成』（森話社、2008年）に掲載されている。

こうして私たちは何度も「テクストが生まれる時」、「テクストが変わる時」に立ち会うことができた。この共同研究は、テクスト内の空間や構造ではなく、テクストの歴史的な位相や変化を捉えようとしたのだと改めて実感する。唐突なようであるが、それは「人間とは何か」を科学的に分析するのではなく、哲学的に考察し、詩的に想像することに似ている。「人はどこから来て、どこへ行くのか」というあの永遠の問いを思い起こさせるのである。

いささか饒舌ではあるが、共同研究「テクストの生成と変容」を振り返ってみた。あっという間の３年間であった。そして本研究科に文化動態論講座が新設されたことに伴い、「広域」と名前のつく講座は今年度限りで幕を閉じる。短かい間ではあったが、「広域」の名の下に、異なる専門分野の研究者が集って議論を戦わしたことが文学研究科の歴史に刻まれたことは、素晴らしいことであったと信じたい。広域文化形態論講座は昨年度で終了しているので、2007年度の広域文化表現論講座は、広域の講座としても最終年度であったことになる。

本共同研究に参加されたすべての先生方・学生諸君に感謝申し上げる。そして広域文化表現論講座のリサーチ・アシンタントを務めた辻村尚子（2005年度）・浜田泰彦（2006～07年度）の両君に御礼申し上げる。両君の力添えがなければこの共同研究の運営は極めて困難であっただろう。最後に、さまざまな難題に対応して下さった文学研究科の事務の方々にも心よりお礼申し上げて、この長い（あとがき風の）序を閉じたいと思う。